



08

銀座街づくり会議

www.ginza-machidukuri.jp

104

銀座街づくり会議 / G2020 連続シンポジウム :: 新しい銀座ヴィジョン ～未来にわたって銀座が個性輝く街でありつづけるために～

連続
シンポジウム

第4回

変わりつつある都市の街並みと建築

銀座では1998年に「地区計画銀座ルール」を中央区とともに策定し、99年に「銀座街づくりヴィジョン」を発表しました。そこから18年が経とうとしています。社会情勢の変化、銀座の変化をふまえ、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックという大きなイベントを契機に、新しい銀座ヴィジョンづくりに取り組む時期と考えています。その議論の場として連続シンポジウムを企画し、第4回が開催されました。

5月15日（月）、銀座フェニックスホールにて、連続シンポジウム第4回「変わりつつある都市の街並みと建築」が開催されました。岡本委員長による今の銀座の課題、目指す方向性についての説明から始まりました。

続くトークセッションでは、「変わらぬ建築と激しく変わる広告媒体との調和」というテーマで、谷口吉生さん（建築家）、豊田啓介さん（建築家）、小林博人さん（銀座街づくり会議アドバイザー、建築家）が登壇されました。

銀座は、「伝統と革新」、「にぎわいと風格」、「個と全体」という相反するものごとをあわせ持つ街です。司会進行の小林さんは、これらの特徴を挙げ、この「両義性」こそが銀座らしさであると言います。

両義性は、GINZA SIXにおいても建築の大きなテーマでした。「商業性と公共性」、「激しく変化する商業施設と緩やかに変化する街並み」、「建物全体の統一感とテナントの個性」。GINZA SIXの建築は、これらの対立を解決する仕事だったと谷口さんは語ります。そうした対立をひとつのシステムとして提案したことで、それぞれが個性を出しながらも、全体のルールには従うという考え方が建築に取り込まれました。

一方、銀座の両義性こそが街並みにおける課題を生み出しているとも小林さんは言います。広告・看板が建築が覆い、建築の美しさを阻害することは銀座の大きな課題です。広告・看板はにぎわいの要素でもある一方、その乱立は風格を壊しかねません。しかしながら、全体のまとまりや落ち着きといった風格が強調され過ぎれば、今度はにぎわいが失われます。こうした対立したテーマの共存が銀座らしさでもあり、難しさでもあるのです。

近年増加しているデジタル技術による動的な表現は、街並みの中では過剰なにぎわいになることが多いため、

動的な表現を含めて、広告・看板の乱立を街並みの中でどう扱っていくか、銀座では議論が続いています。

デジタル技術を使った広告といえば、建築物を覆うような巨大なスクリーンがイメージされがちです。そうしたダイナミックな使われ方が多い中で、例えば天候の変化や光の反射など、自然の動きに反応するようなものだったり、あるいは外からの刺激で映像がゆるやかに動くようなやわらかな表現も可能になってきています。

豊田さんは、自然や人の動きと呼応するようなデジタル表現に挑戦しています。銀座の課題に対し、デジタル技術を全面に押し出すのではなく、デジタル技術をモノや情報と区別せずにデザインの一部として取り込むことができると、街並みでも受け入れやすいのではないかと、と豊田さんは語ります。そのうえで、銀座が目指す、ある傾向に導くようなプラットフォームをつくることはできないかと提案します。つまり、この場所でなにかを表現したい！と誰もが思うようなプラットフォームを銀座が提供し、創造性を引き出しながら、プラットフォームという一定の枠＝ルールのなかで表現してもらうことで、結果的に銀座が目指す街並みに誘導することができないか、ということです。そこに、建築や広告を超えた新しい表現の可能性があるのではないかと豊田さんは期待を込めました。

谷口さんは、GINZA SIXのファサードデザインで、「ノレンとヒサシ」というプラットフォームを用意し、さまざまな建築家・デザイナーの挑戦を建築に取り込みました。そして「全体と個」、「調和と独自性」の両義性を持った建築ファサードが実現されました。

銀座が用意するプラットフォームとはどのようなものでしょうか。新しい銀座ヴィジョンに向けて、大きなヒントを得られたシンポジウムとなりました。